

旅の一区切り

旅は行きたいところに行ってしまうと終わりとはいえないから厄介である。回数を重ねるごとに点が線に、線が面となるように比較するものが増え、旅は益々面白く奥深くなり、考えさせられることが多くなる。自分の旅は山旅から始まった。その後に出会った沙漠に惹かれ、沙漠で出会ったイスラム教へと興味関心が広がっていった。しかし、心の片隅には仏教徒の穏やかな顔がちらつき、イスラム圏の後に東南アジアを旅する日々が続いた。

仕事から解放されると高校山岳部以来憧れていたヒマラヤ、ロッキー、アルプスでの山登りと山スキー、地理で想いを膨らませていたアマゾン川流域のセルバ、プエノスアイレスを中心に半径約600 kmのパンパ、ヨーロッパ代表する平原プスタ、そしてアルゼンチンとチリの南部でネグロ川以南のパタゴニア、シベリア鉄道へと行動範囲が広がり、南米最南端の街、ウスワイアまで足跡を印すことができた。ここで南極行きクルーズ船を見て自分でも手が届くことを知った。同時に、シベリア鉄道とオーストラリア横断鉄道の旅では、航空機による移動を凌ぐ贅沢な時間を味わえることを知った。

これまで「何故独り旅をするのか」、「何故辺境の地へ行くのか」、「何処の国が一番良かったか」などなどを何度となく尋ねられた。独りで旅をしていると身近な人、気になる人のことを不思議と想いだす。紛争地や治安のよくないところでは、日本がいかに安全で、日本に生まれて良かったとしみじみ思う。また、いわゆる発展途上国で物資的にあまり豊かでないところでは、人々の生活力に圧倒されるし、シンプルな生活のなかに力強く生きる姿を目の当たりにし、自分はもう戻れない如何に弱い人間であることを知らされた。また、圧倒的な自然を前にすると、人は言葉を失い、沈黙してしまうことも知った。

これまで旅をしたコスタリカの熱帯雨霧林では湿度 100%に近く、汗と湿気の区別がつかなかった。最も過酷な沙漠と言われるイエメンのルブアルハリ沙漠はカラカラに干上がっていた。最高気温はサハラ内陸部、モロッコのザゴラで 53℃、最低気温は 1 月の富士山などの -32℃である。高度はパンジャブ ヒマラヤ（インド）で 6,000m、最低はヨルダンの死海で -400m、人工的にはスウェーデンのイエリヴァレ鉄山の -1,000mなどなどである。

今から半世紀近く前になったが、パンジャブ ヒマラヤに向けてのキャラバン中、立ち寄ったチャイハネ、茶店でどうにもならないほどのノミをもらった。しかし、4,000mでのキャンプの頃からノミは姿を消し始め、4,500m のベースキャンプでの生活中に一匹も居なくなってしまった。ボリビア、ポトシの高度は 4,000mで、人が住む都市としては世界 1 の高度である。今でも馬車が交通手段の主役を担う街だった。いたるところに馬の排泄物が落ちているが、1 匹のハエも見当たらず不潔感がなかった。JICA で働く方にハエのことを話したら、この街にはゴキブリも居ないと教えてくれた。無敵を思わすハエやノミ、ゴキブリよりも、ヒトの方が余程しぶとい生き物であることを実感した。

このような過酷な所でも時計（SUUNTO, FINLAND）とカメラ（Nikon）は正常に作動した。体は寒さで動きが鈍くなったり、高度でだるくなったりしたが、体調を崩すことなく過ごせるから驚きである。過酷な自然環境は身体には良くないことは確かで、沙漠から帰るとシワが、酸素不足の高山から帰ると白髪がどっと増えた。これまでの旅は、現地の人々が食べているものがその土地の気候風土に適した食であり、現地の人々とは積極的に接することをモットーとしてきた。これが億

劫になったら進んで隠居生活に入ろうと思っている。

2023 年度の夏は 126 年ぶりの酷暑の夏であった。国連事務総長は「地球温暖化の時代は終わり、地球沸騰時代が来た」(7/27)と述べていた。異常気象は美しい地球に悪影響を及ぼすことは必至である。また、コロナウィルス禍で貴重な地球全域が鳴かず飛ばすの 3 年間になった。生物兵器研究からの流出が指摘されているなど不穏な世の中である。「紀行文で綴る世界の地誌」を連載中にロシアによるウクライナ侵攻が始まった。理不尽なロシア側の言い訳にロシア人の冷血さを非難する声を身近なところで何度か耳にした。しかし、これは戦争の引き金を引いたクレムリンの極一部の人たちである。自然環境の厳しいシベリアで暮らす人々はお互いに助け合わなければ生きて行けない。バイカル湖の畔の民宿でお世話になった家族は、田舎のお婆さん、お爺さんのように暖かった。戦争とは始める人は安全で、悲惨な目に合うのはいつの時代も善良な市民である。ウクライナでの戦争行為と同時に、イスラエルによるパレスチナガザ地区での破壊、殺人行為も続いている。食料などの救援物資すら運び込めず子どもたちの命が危機にさらされているという。容赦ないイスラエルの攻撃に「これ以上、何を破壊しようとしているのか」のパレスチナ人の叫びに心が痛む。パレスチナ人抹殺を目指していると思えないう。これらの無益な争いを、21 世紀だというのに地球上の誰もが、如何なる機関も止められないことが苛立たしい。戦争を止めない、攻撃を緩めないと叫ぶ国があり、他国の戦争に自国民を兵士として送り出す国家も存在する。戦争は人類最大の自然、環境破壊行為で人類にとって何一つプラスになることはないというのに、悲しいが今日の世界の現状である。

エピローグ

県立高校社会科(地理)の教員退職後、鶴岡市立荘内看護専門学校で「文化人類学」を 20 年、東北公益文科大学で「世界地誌」を 17 年間も非常勤講師を務めることになるとは夢にも思わなかった。双方とも 4 月から 7 月まで、週 1 回で、教材研究の時間を十分に取れたこともあり、実体験にもとづいた手づくりの教材、資料で授業を進めることができた。授業、講義は、独りよがりの面を差し引いても楽しかった。

年々教材を差し替え、書き換えるなどしているうちにかなりのページ数になっていた。これに話題として取り上げてきた現地で感じたこと、考えさせられたことなどを綴った、〈紀行文〉を新たに加えて書き換えたものである。これまで使用してきた教材、資料が基になっているので、「地誌」の言葉を入れて、「紀行文で綴る世界の地誌」としたが、話題として取り上げた紀行文が主体となっている。また、今は亡き鶴岡在住の YN 女史からご指摘があった「旅の割には社会還元が少ない」に応えたい気持ちも後押しとなったことも確かである。

若い時と同じようにとはいかないが今も、気ままな旅を続けている。さすがに食に対する冒険心とでもいうのだろうか、初めてのもの、珍しいものを次々と食することは少なくなり、口に合ったもの、食べなれたものを優先するようになった。また、幅広く動き回るより、一カ所に留まり天候と相談しながら行き先を選ぶなどの余裕も出てきた。若い時と変わらないのは、違いと同一性、肯定と否定の繰り返しのうちに旅の面白さがあることと、国際線空港の待ち時間が好きなことである。周りにいるのはみんな異国の人たちである。アフリカや中近東あるいは南アジアやラテンアメリカだと、それぞれ特徴のある民族衣装姿が目立つ。行き交う人たちは、みんな違う世界に住んでいる。多

分価値観も違うかも知れない。飛び交う言葉は解らないが嬉しさに満ち溢れた顔、悲しみにくれた顔、不安に沈んだ顔は判別できる。同時に、人の思いがこうも同じと知らせてくれると同時に、こうも違うことにも気づかせてくれるところでもある。

ルーマニア、ブカレスト空港でセキュリティチェックの厳しさに呆れ顔をしていたルーマニア在住イギリス人と視線が合った。これが縁で2時間近くルーマニアのこと、イギリスのこと、日本のことなどなどを話し込んだ。自分の心の片隅にあるイギリス人像とはかけ離れて身近に感じられた一時だった。

アジアから始まり、両極地方で締めくくってみると、旅をしながらここで取り上げなかった国、朝鮮半島板門店でのピリピリした空気、休戦ラインすれすれの北朝鮮展望台に並ぶ拡声器の束、イスラエル出入国時のパスポートは白紙のままだった。トルコイスタンブール街角で転がってきたボールを蹴り返したのが縁で居候先である兄のアパートに招待してくれたトルコの学生、モロッコ北端ダンジェの市場前の露店でパイヤを食べたいと言ったら市場に走ってくれた陽気な店主、エチオピアのゴンダールで靴底が剥がれたのを懇切丁寧に貼り直してくれた無口な若者、マダガスカルでツィンギー行の時、通訳を買って出してくれた女性、ミャンマーでは、「家で夕食を！」と誘ってくれた女性、微笑みの国タイの心優しい人々などなど懐かしい笑顔が浮かんでくる。

これまでいろんな国や地域を旅したが、まだまだ行きたいところがある。憧れ続けているが政情不安で行けない国もある。年齢からくる数少なくなりつつあるチャンスを逃さないためにパスポートの準備と気力を保ち続けている。力による支配から脱却する人間の精神的進化を願いながら、行きたい所に、いつでも行ける日常生活が一日も早く地球上に訪れることを願っている。

最後に、旅を支えてくれた家族、友人にはただただ感謝あるのみです。多くの読者の方々からお掛けいただいた言葉の数々が大きな励みになって7大陸の紀行文を書き記すことができました。そして、長きに亘って掲載して頂いた荘内日報に深く感謝申し上げます。

2025/4

木村喜代志

略歴 木村 喜代志（きむら きよし）

1938年、蔵増村（現：天童市蔵増）生。山形大学教育学部卒業後、県立高校社会科（地理）教員退職後、1998～2018年 荘内看護専門学校（文化人類学）、2000～2018年 東北公益文科大学（世界地誌）非常勤講師

県立山形東高等学校山岳部入部以来、ヒマラヤ、アルプス、天山、ロッキーの山々やパタゴニア、サハラやルブアルハリ沙漠など7大陸を旅する

日本山岳会永年会員（No.7734）、日本山岳会山形支部、日本山岳会アルパインスキークラブ所属